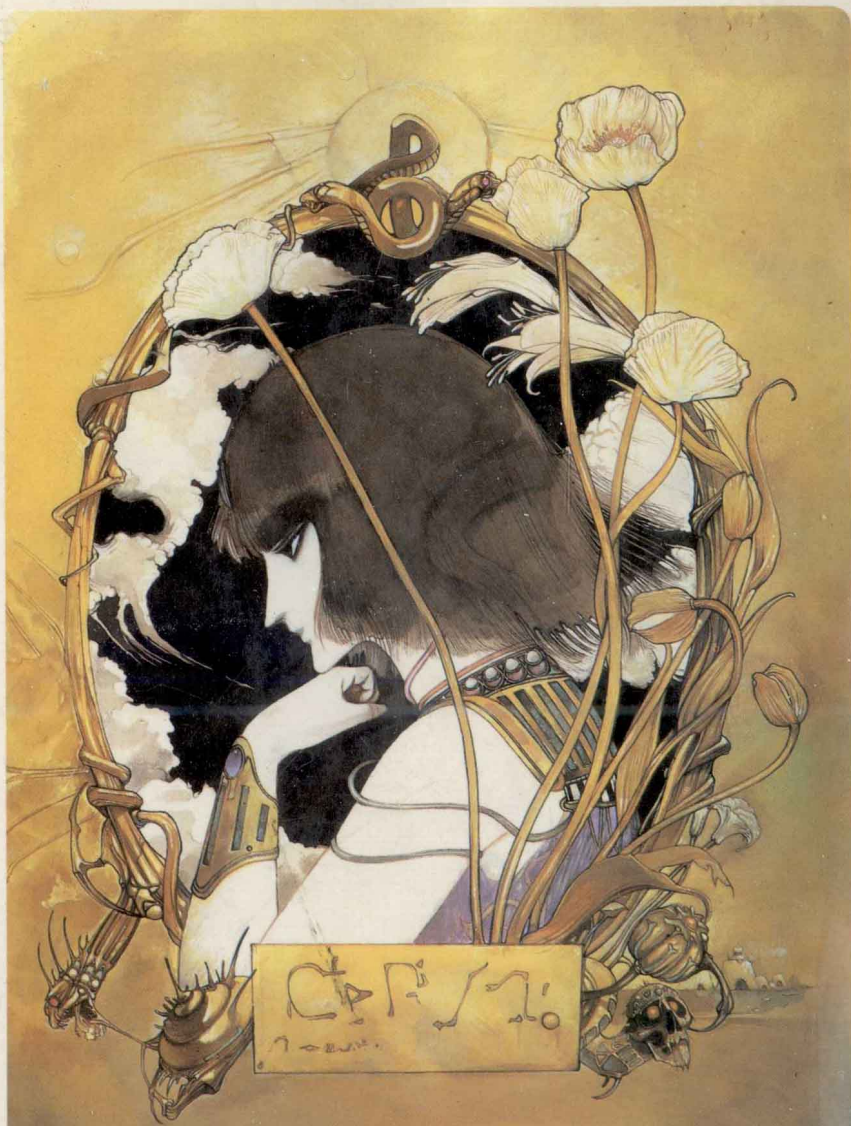


トワイライト・サーガ

カナンの試練

栗本 薫



カナンの試練

栗本 薫



光風社出版

●フランス世紀末文学の巨匠

(A5判函入美装本)

J・K・ユイスマンスの三大奇作

さかしま―美と頽廢の人工樂園―

澁澤龍彦 訳

日常的な現実を拒否した書齋の中で、自己の病める脳髓の造り出す人工的な幻覚に酔う魂

彼 方―惡魔と神秘の人工地獄―

田辺貞之助 訳

伝説的怪人ジル・ド・レーを描かんとし、甘美な陶酔を秘める黒ミサの儀式へ導かれて：

出 発―苦悩と高邁の神秘神学―

田辺貞之助 訳

神秘神学の相貌を理不尽なまでにあさり、行くべき方を模索し、カトリックの魔境を活写

オーブリ・ピアズレー

澁澤龍彦 訳

美神の館

世紀末の頽廢の美を、純粹な線の理想で体現化した画工ピアズレーの創作。付11名作選。

トワイライト・サーガ

カナンの試練・目

次

X	IX	VIII	VII	VI
死者の珠	迷路島	ルカの灰色狼	カナンの試練	リリス
179	143	115	23	5

装幀・口絵
扉カッ ト

天野喜孝

Ⅵ
リ
リ
ス



それがいつだったか、カルスは知らぬ。それははてしなく遠い昔のように思われた。

それはダネインの湿原だった。見渡す限りの黄土、堅牢に見えて人をまどわし、一步ふみこむとズブズブとくるぶしまでひきこみねっとり人を溺らせにかかる黄泥、そのあちこちにかたまつて生えている褐色の草。そのあいだから泥とほとんど見わけのつかぬ水蛇が素早く身をのたくらせて消える。遠く湿原の北に浮かんでいるのはルートの町。まるく腕をふせたような建物の屋根がいくつもつらなつてそれはやはり泥の色をしている。

ここではすべてが泥の色だ、カルスは思った。身をルートの小舟にたくして大湿原をよこぎるかれの上に空が重く灰色に垂れかかっている。南へカルスは目をやり、堅い大地を踏み緑の山々を見ることが焦がれた。かれの連れはそんなかれに冷やかな目をむけて、じつと舟底に身を横たえたりきりだ。深褐色の皮のマントがすっぽりその全身を包んでいる。カルスの手足にもマントの上にもはねかえる泥の飛沫が点々として、それをカルスはぞっとするほど不愉快に思ったが、洗い流す水とてなかった。

ああ、ここは泥ばかりだ、カルスは思つて南を見上げた。はてしない泥の海、サーリスベリの泥濘、いつここからぬけだせるのだろう。

かれの心はふと奇妙なかれの連れの上におちた。ルートの汚ない小屋で会ったときのことをかれ

は思った。

それは奇妙な出会いだったのだ。カルスはひょんなことからルートの町の富豪に雇われて赤い街道を西南にむかった。隊商は無事にルート町の町につき、カルスは給料を受取ると解散した隊商をあとに、盛り場へ出かけた。しばしの休息と快楽を求めて——しかしルート町の町はかわいた黄土色一色の町で、かれはそのエキゾチックで貧しい町の風景にうんざりしていた。汚れた白布をからだにまきつけている褐色の女、男、裸の子供ら。それは暑くかさかさした町だ。男たちはしわを刻んだ疲れはてた顔をみせ、背をまげて水おけをはこび、女たちは泥の家の前で泥をねってかめをつくる。酒屋で褐色の男女にまじってひとかめの麦酒をすすり、かれらと同じように麦のみがらを床にはきだし、乾した辛い肉をかじったあとで、カルスはごみごみした通りを歩いた。かれは若く、肌は日にやけて褐色になってルートの人々と殆ど見わけもつかぬほどだが、ちぢれ毛でかなしげな目をしたかれらの中で、カルスの灰色の剛毅な明るい目とまっすぐなこわい髪、それよりも、すらりと伸びて樫の木よりもがっしりとした、胸板のあつい逞しいからだは人目をひいた。

おそらくそのためであつたかもしれない。しばらくいくとひとりの小男がちょこちょこかれの前に出てきて見上げた。

「若い傭兵さん、あんたのまだ味わったことのない快楽をあげるよ。ふつうの女じゃないのだよ。あたしでなければ紹介してあげられない、この世のものとも思えない快楽だよ」

「黒蓮の夢に用はない」

カルスはむっつりと云いすて女衞^{めい}からはなれようとしたがかれは食^くいさがった。

「カナンの夢にも出てこない美女。キタイの山猫娘だよ。さあ、傭兵さん、これを逃したらあんたは真の女を知ることができぬ。彼女は男を食べてしまう」

カルスは笑った。

「真の女は知りつくしているが、ではそれと比べてみるか。どうだ、案内してみろ」

「あんたは利口者だ。夢のような一夜を持てるよ」

女衞は齒をむいて笑った。それがひどく因業な感じを与えた。

かれはカルスを他の家と少しもかわらぬ土の円屋根の家に案内した。四角い入口がぼっかり切られている。中は暗い。

「さあこの中だよ。お楽しみ」

カルスはずんずん入っていった。入口は小さく、身をかがめぬと入れない。ひとつ室をとおりぬけ、次の室に入る。そこに彼女はうずくまっていた。

その眼がきらきらとこちらを見あげる。ふいにカルスは胸がさわいだ。なにか異様さがあるのだ。室の中は貧しく、隅にわらの寢床とそれにかけたシートがあり木の卓に魚油の皿と水さしのあるほかは、泥でぬりかためた室内は何もなかった。その中に彼女はしなやかなからだの線を挑発的に見せてうずくまっている。

「あんたはお客ね。遅いのね。ルートの人じゃない」

彼女は呟いた。カルスはその声が気にいった。ぴんと張った銀の糸のようだ。

しかし――

「どうしたのよ。来ないの」

カルスは目を細めて、奇妙な異和感の衝動と戦っていた。ふいにかれは魚油の灯の皿をとると彼女にさしつけた。そして低い声をたてた。

彼女は殴られたように身をのけぞらした。逃げようとしたが、カルスの目はもう、ふしぎなその顔を見ていた。

人間ではない！

惑乱がかれをおそう。彼女はしなやかな肢体も、目鼻の数も、べつに人間とかわらなかったが、それでいて彼女は人間ではなかった。その眼――！ その眼は通常の人のような白い部分を持たなかった。弓なりに切れあがったその眼は青くきらきらし、その中に細い黒の紅彩がある。それは猫の眼なのだ。

そして彼女には眉がなかった。それは最もよく、猫を思い出させる顔だ。逆三角形の、真中の高い小さな顔。唇はひどく小さく、紅い。両耳がとがって小さい。豊かな銀色の髪が何の手も加えられぬまま片方の肩から胸へこぼれている。ものをいうときルビーの唇から、白いとがった歯が見えた。

「あたしを見たの――あたしを化物というのね」

彼女は打たれた獣のように寢床にうずくまり、眩きながら両手で顔をかくした。細い長い指が四本。

「なんて名前だ」

カルスはきいた。女は指をはなし、猫の眼で彼を見た。野性のきびしい緊張した美しさが彼をうった。

「聞いてどうするの」

「その名を呼ぶんだ」

女の目が細くなった。

「リリースよ」

カルスは微笑した。リリースとは古い伝説で、女神イラナと美少年マリウスの愛を争った半神半獣のニムフだ。結局それは争いに破れて獣になってしまふのだが。

「リリース」

カルスが呼んだ。女はずるそうに笑った。

「さあ、あんたは名を呼んだ。それで、それから、どうするの？ あたしと寝る？ あたしは化物だから厭？」

「お前は変わっているな。どこからきたんだ。カラヴィア、カラクダイ、辺境のどこにお前のような野性のふしぎな種族をはぐくむ国があるのだ？ 俺は諸国をまわりいろいろな人々を見たがお前の種族ははじめでだ」

「種族——」

リリースは眼をとじた。ふしぎなくらい、その顔はさびしくたよりなくなった。

「種族があるものは、どんな姿をしていようと、化物ではないのよ」

「お前にはないのか」

「ないの」

リリスはやにわに魚油灯の皿に土くれを投げつけて消してしまい、室は暗くなった。

「ああ、こうすると自由に息ができる。あたしは夜が好きよ、あたしが見えないから。あたしは夜でも、ダネインの水蛇さえ見えるの。あなたはあたしを見たりせず、抱いて、そして帰ってくればよかったのだわ。あたしは男に凄く快楽をあげられるの——そのひとがあたしを見ない限りね」

カルスは手をのばし、わらをさぐりあてると座った。この女に興味をおぼえたのだった。卒直でさびしい、猫のような女。野性の匂う、異形の美。

「女衞はキタイの山猫といったな。キタイで生まれたのか」

「知らない」

闇の中で女の瞳が緑色に燃えるのをかれは見た。

「そんなにねほりはほり何故きくの。あたしと寝ないのに用があつて？」

「あるさ。話をきかせてくれ。お前は美しい。野性ではりつめて大胆な美しさだ。おれはお前の国を知りたい」

リリスは押し黙った。ふいに、カルスは彼女が嚙り泣きはじめたのに驚いた。

「あたし——あたし、美しいといわれたのはじめて。馬鹿ね。でも涙がとまらないの」

カルスはひどく彼女を可憐に思った。手をのばしてさぐって、彼は彼女の肩に腕をまわした。そ

れは細くもろそうな感触だった。彼女はじっとしていた。

「嬉しいわ。ふしぎね。あたしあんたが好きなのよ」

リリスは囁いて身をよせた。熱い体温がカルスによりそう。

「じゃあ何でも話しましょうね。あんたはあたしを見て化物といわなかったから、あんたと話をするのうれしいわ。ねえ、あたしこの町が嫌い。ダネインの湿原も嫌い。泥、泥、泥、泥ばかり。泥の他何にもないわ。あたしの肌は真白よ。あたしルートの人々も嫌い、あの汚い茶色の肌は泥からできたに違いないわ。ああ、泥！ あたし生まれてから泥のない世界を見たことない」

「おれはトルースの草原を見せてやりたいよ。トルースは草原の国なんだ。ダネインみたいに広いが泥なんて一滴もない。見たすかぎり緑の草が、青い空の下で風にそよいで、よく見ると草には白い花が咲いてる。おれは馬でそこをかけるんだ。もう何年見てないか！」

「緑の草、風、白い花。すてきだわ、泥よりはいいわ。あんたは緑色の匂いがするわ。あたしね、信じないかも知れないけれど、夢でときどき故郷を見るのよ。タン・ローはあたしがダネインの泥海を、小さな舟みたいなものの中に入ってただよってのを見つけてひろいあげて育てたの。だからあたしはふるさとを知らない筈なんだけど、はっきり見てるわ。」

ああ、ふるさと——そこは、ふしぎなところよ。銀色の大地、銀色の道。高い高い建物も銀色。空を飛ぶ船がとびかっているわ。もちろん、そこに住んでる人はみんなあたしみたいな顔なの。そしてこんなことばじゃない、音楽みたいなやさしいことばでしゃべりあっている。そしてね、空には二つの太陽が——赤いのとオレンジのがあるの。寒さも暑さもあたしを苦しめない、そしてあたしは

世界のむこうがわも一瞬で見ることで壁をもつてゐるの。『エアポート』——何だか知らないけれどそういうんだわ——には大きな船がたくさんあって、それは海でなくて星から星へ渡る旅をするのよ。あたしはそこで自分と同じ人たちと話をするわ。幸福よ。そして眼をさますと——泥、泥、泥なの。あたしを氣狂いだと思ったでしょ？」

「いや——」

考え込みつつカルスは呟いた。

「そういう国があるのかもしれないな。君は前世の記憶を夢に見るのだ。いつか、靈魂は前の身体が死ぬとそれを忘れて次の身体にいくが、何かの拍子に前の記憶がよみがえるので、知らぬ筈のものをなつかしく思うのだときいたことがある。しかし——もしそうなら、君の国はこの世界にはないな。カラヴィアでも、カナンでも、キタイ、ロンザニア、ハイナム、どんな秘境でも太陽はひとつだし、空飛ぶ船の話もきいたことがないからね」

「そうね。でもいつか見つけられたら、すばらしいわね。」

タン・ローが云ったけど、ずっと前、ある晩、とても大きな星が流れたんですって。ふしぎに思つてダネインに舟を出したら、あたしを拾つたのよ。で布をひらいてみたら、こんな赤ん坊だったから、リリスと名をつけたの。

でもあたしタン・ローにはもう恩をかえしたと思うわ。あたしの身体でもうずいぶんかせいだのよ。あたしいつかルートを出て、泥の海を逃げ出して、あたしの国をさがしたいの。せめて、泥じやない世界を見て、汚らしくない白い肌の人々を見て、青い空と緑の草原を見て——そうしたらあ